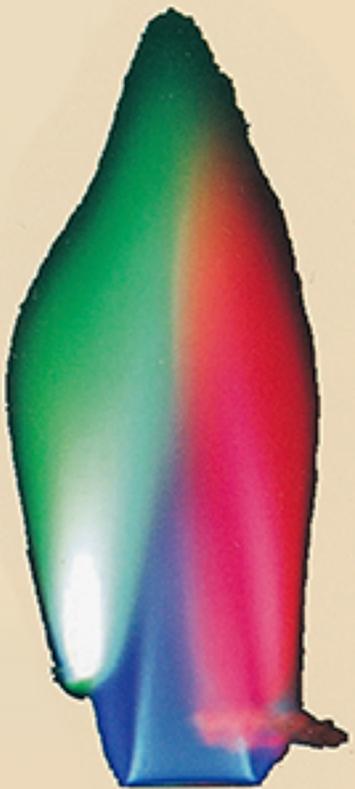




著者・青山淳平
挿絵・山本良秋
発行所・本の泉社



『小説・修復腎移植』

水野は定期検診がすむと、昼食はいつもテレビをみながら港の食堂でとる。

この日も昼食のあと待合室で缶コーヒーをのみ、岸壁をぶらついた。もやっている小型漁船の舳先にむれる小魚をながめ、海へ視線をうつしてぼんやりとした時間をすごした。

海も港の建物も冬の透明な日ざしにつつまれ、水野の視界のなかにしずかにおさまっている。ふと「浄福」という言葉がうかんだ。まだ生かされていることがありがたく、「おかげさまで」と念じながら、水野は内藤医師へあうため、車を発進させた。

二十年間もの長期にわたって市立病院の院長をつとめた内藤は、いま城山の南麓にあるこぢんまりとした診療所に内科医として勤務していた。かれは医師としてはもとより経営者としてもすこぶる優秀で、院長時代に取り組んだ腎不全対策と地域医療の推進に多大な功績があったとして、厚生大臣表彰をうけていた。ことしで七十四歳の高齢だが、市民トライアスロンを趣味にし、いたって壮健である。平日の夕刻は夏の大会にそなえて温水プールで泳ぐか、闘牛場周辺をジョギングし、夜は古文書をひもとき、宇和島伊達藩の研究に余念がない。

診療所の二階の東南の角には応接室があり、内藤はいつもここで水野と会うことにしていた。南の窓からは市立病院の古色蒼然とした建物がみえる。百年近い歴史のある病院なのだが、敷地が手狭で思い切った増改築ができず、設備や機器は時代遅れで、駐車場の不足は深刻だった。内藤は院長の時代に、隣接している松山地裁と地検の宇和島支部の敷地を買い取り、そこに全面改築をしようとしたが、地裁と地検の移転が困難なため、立ち消えになったいきさつがある。ところがその後、内藤が院長を辞め、市長がかわると移転がきまり、市立病院は新たに確保した二千坪の敷地に総事業費二百億円の巨費を投じて、全面改築されることになった。昨年の夏から基礎工事がはじまり、大きなクレーンがうごいている。

応接室へはいると水野はすぐ窓辺にゆき、

「最先端の医療施設になりますね」

とクレーンをながめながらいった。

「ええ、それは拠点病院ですから」

内藤も窓辺に立ち、自慢そうに応えると、うまれかわる病院の概要をかいつまんで話した。外観も内部も都心の一流ホテルのように明るく清潔なイメージの病院にしたい、という院長時代のコンセプトが取り入れられているので、内藤は率直によるこんでいた。応接ソファに腰を落ち着け、むかいあった。

水野は「えひめ移植者の会」の会員たちのことを話題にした。この会は、水野が初めて腎移植をうけたとき、内藤が移植者たちの組織をつくるよう、退院する水野に働きかけて結成されたものである。いま百五十名をこえる会員がいて、その大半は丸山が手術をした患者であるが、ここ最近では医学部附属病院や県立病院で移植をうけた患者の会員も増えている。世話役の会長を水野が引き受け、内藤は顧問として会の運営を支援していた。

移植者の会は七月に松山で総会をひらくことになっている。

「ほら去年、アイリッシュハーブの演奏がありましたね。あれはよかった。あつたかい雰囲気でした」

内藤はおだやかな表情で感想をつたえた。

大学時代から趣味でフルートを吹いている水野は、微笑をうかべふりかえった。

「総会で演奏をいれたのは初めてでしたが、さいわい好評でした。あのアイリッシュハーブは有吉裕美という音楽の先生です」

「ほう、音楽の先生ですか。どこにお勤めですか？」

「以前、松山市内の中学校で教えておられたそうです」

「……:という、いまは退職されているのですか？」

内藤はちよつと残念そうな顔をした。

水野はいたわるようにいった。

「二十代の後半と三十になつてすぐ、両親からひとつずつ、二度移植していますから、続けることは難しかったでしょう」

「なるほど、そうですか……」

そのような苦難をみじんも感じさせない明るくさわやかな女性だった。

透明なガラスごしに、市民が愛してやまない鬼ヶ城山系の山肌が冬日に映えている。丸山医師が市民病院で腎移植をはじめたころ、院長の内藤は看板の医療スタッフを誘って、よく鬼ヶ城へ登った。丸山も山が好きで、手術のあとは猟犬のように山奥までわけいつていた。

内藤はたしかめてみた。

「その二度の移植、丸山先生ですか」

父母の腎臓をひとつずつというケースは珍しかった。両親の並大抵ではない情愛と心労を感じる。

「いえ、県立病院だそうです。昔、市立病院で丸山先生の部下だったドクターが手術さ

れたそうです」

「そうですか。それなら安心だ」

腎移植で全国に名声が知られるようになった丸山のもとには、各地から熱意のある若手の医師があつまってきた。県立病院の移植医もそのひとりである。

しかし、移植医として名が高まるにつれ、丸山も出身大学の医学部からの研修医を優先してひきうけざるをえなくなった。内藤がまだ院長だったころは、丸山も熱心に指導していた。ところが七年前に内藤が退職すると、丸山と出身大学医学部との間になにかと波風がたつようになった。職人氣質の丸山と、プライベートを優先しがちな出身大学派遣の医師との間で、なんども対立があったと聞いている。

丸山のことだったので、

「そういえば今日、丸山先生が妙なことをいわれました」

と、ふたり組のことを知らせると、内藤の表情がこわばった。

「それは、刑事ですよ」

「刑事？まさか」

「まちがいありません。最近、気がかりな噂を耳にしていますから」

「丸山先生のことですか」

「そうです」

「丸山先生を刑事が調べている？」

「そのとおり。警察がうごきだしている」

「どういうことですか一体？」

水野はおどろき、内藤の方へからだをのりだしていた。

内藤は日焼けがとれない面長の顔を両手でごしごしとこすった。

やおら上体を水野のほうへ近づけて、いった。

「丸山は移植マニアだ、という噂をだれかが流しています」

「移植マニア、なんですか、それ、バカバカしい」

「そのとおりだが、黙殺することはできませんよ。警察がうごいていますから、噂の背景には何かがあります」

「内藤先生には、こころあたりがあるのでしょいか」

「推測はあります。このバカげた噂の背景には嫉妬がある、とにらんでいます。丸さんのことを面白くおもってない連中は、最近ますます不快感をつのらせている。となりに蔵

が建てばこちらは腹が立つ、です。医者や医学の世界だって同じです。いや、もっと悪質かも知れません」

という、内藤は丸山をとりまく移植学会の人間模様にふれた。腎不全に苦しむ患者のことを見るに見かねて、一念発起した丸山が内藤院長の支援のもと、アメリカの大学で移植手術を学び、市立病院で最初の腎臓移植手術に成功したのは、一九七七年十二月のことである。それから三十年、丸山はじつに六百例をこえる移植手術を手がけていた。かれは日々自ら鍛錬し、利き腕に仕上げた両腕を自由自在につかうことができた。その術技はまさに神業で、手術の時間も出血量も平均値の半分以下だった。予後の患者管理もすぐれており、いま腎臓移植で丸山に追隨する医師は日本にはいない。

内藤はつづけた。

「たしかな情報ですが、丸山が愛媛では移植ができないようにしてやる、と本気で息まいている連中がいるのです」

「そんなむちゃくちゃな話、本当ですか」

「まあ聞いて下さい。ただしこれはここだけの話ですよ。絶対に口外なさないように」
内藤は強く念をおした。

宇和島恵州会病院の八階建て病棟の骨組みができた二〇〇三年初夏のことである。

夕闇にまぎれて、市役所の病院局長が内藤の自宅をたずねてきた。内藤のあとをついだ院長から「丸山をクビにしろ」との要望がたびたび局長へもちこまれるようになり、たまにかねた局長は話を市長へあげる前に、丸山医師の親代わりでもある内藤に、退職の勧奨をたのみにきたのである。すでに出身大学の医学部と丸山との間で研修医や派遣医師をめぐって生じた対立はのびきならないところまで深刻化し、医学部側から丸山の処遇を変えない限り、医師の派遣についてすべて再検討したい、と強硬な申し入れがきていた。後任の院長は、全国移植学会幹部とのつながりが深く、丸山を毛嫌いし、数年前から丸山を追いつけようとしていた。こうした裏事情をよく承知している内藤は局長へ、

「この件で市長を煩わしてはいけませんよ」

といふくめ、話が市長におよばないよう配慮した。

翌日の夜、内藤は丸山を酒席へひっぱりだした。

丸山はあつけらかなとした表情でいった。

「わたしがおったら困るというなら、出してもらってなんちゃかまわんです。じゃけどできたら泌尿器科のあるとこがええなあ。それも移植ができるとこやったら、日本中どこ

でもかまわんです」

「じつは丸さん、あんたをぜひ欲しいというところがある」

「ほう、どこですか、それは」

「惠州会ですよ」

局長が帰ったあと、知人の医師を介してさつそく惠州会へ丸山のことを紹介すると、惠州会から開院したらぜひ受け入れたいと快諾されていた。

「移植はできますかな？」

「ええ、もちろんですよ。丸さんを三顧の礼でお迎えしたい、と惠州会本部の野添紘治郎事務総長からじきじきに電話をいただいています」

「そりゃ、ありがたいなあ」

丸山は子どものように顔をほころばせていた。

こうしたウラ事情で丸山は惠州会へかわり、丸山をめぐる問題は収束するかに思えたが、そうはならなかった。これまで年平均三十例以上の腎移植をてがけてきた市立病院の移植数は十分の一に激減して、泌尿器科は評判をおとし、患者の大半は通院先を惠州会へかえてしまった。いっぽうの惠州会は開院以来まだ二年もたたないが、すでに六十三例こえる移植をおこない、一躍全国の名だたる腎不全対策総合センターの一角をしめることになった。余波は県立病院にも医学部付属病院にも及び、移植数も患者の数も減ったままである。

「ほうりだしたつもり丸山が、水を得た魚のように元気になった。惠州会で思う存分手術の腕をふるい、全国の腎不全患者たちから神様のように崇め^{あが}られている。これはねえ水野さん、旧帝大出の同業者には勘弁ならんことなんだ。地方大学の新設医学部出の丸さんには学閥も学会のしがらみもなく、自分の腕一本を頼りに術技をみがいてきた。地位にも名誉にも無関心で、頭の中にあるのはいつも患者のことばかり。こんなところもまた同業者の神経をさかなですることになる」

「おかしな話ですね」

「田舎の医者が、中央で権力をにぎっているだけの自分たちよりもはるかに実績をつみかさね、えらい目立つ存在になった。かれらにしてみれば目ざわりで不愉快きわまりないんだよ。男の嫉妬は怖い」

「しかし先生、警察は何を調べようとしているのでしょうか？」

嫉妬されるだけなら、犯罪にならない。

内藤は尖った頤^{おしがい}に手をあて、水野をまっすぐに見すえた。

「そこだがね、だれかがまず悪いうわさをながし、それから……」

「それから？」

いいよどんでいた内藤は、ひとつ咳払いをした。

「推測だがね、だれかが丸さんの手術のことで臓器移植法（一九九七年十月施行）にからむ情報を意図的に警察ヘリークした。それで警察も放つてはおけず、内偵をはじめた」

「なるほど、臓器移植法ですか」

臓器移植法違反容疑なら、刑事が丸山の周辺捜査にのりだすこともありうる。おびえに似た感情がわきあがるのを水野はおぼえた。

生体腎のやりとりの場合、臓器の対価として財産上の利益供与をとまうおそれがあるので、この法律は脳死移植を容認し、かつ臓器売買を禁止することを目的として九年前に施行されている。全国移植学会でも生体からの臓器移植については、「六親等以内の血族と三親等以内の姻族」に限って認めるという倫理指針をもうけ、臓器売買を固く禁じている。しかし、術者がまったくあずかり知らないところで、法律や倫理指針にふれる臓器のやりとりが行われている可能性は否定できない。生体腎の移植は善意のやりとりといっても、夫婦や親子ならともかく、ドナー（臓器を提供する患者）が遠い親族になればなるほど、法律が感謝の表現を言葉や常識的な儀礼だけに限定しておくことは、人情からいってもどだいムリなところがある。多額の金銭報酬を目的とした移植のための偽装結婚や養子縁組がおこなわれる可能性は否定できない。また法律のしぼりのない海外へ、臓器をもとめて渡航するケースはあとをたたない。

水野は丸山をとりまく危うい事情をあらためて察し、自戒した。

「ここしばらく、油断できませんね」

「うごいていたら県警の生活環境課ですよ。水野さん、新聞社のほうでも何か情報をつかめたら、すぐに僕のほうへ知らせてくれませんか。なにしろ丸さんはあのとおりの人だ。患者を疑ったりはせんから、われわれで守ってやらねばならん」

内藤は見えない敵にいどむかのように表情をひきしめた。

急ぎの仕事などあるはずもなかったが、松山にもどると水野は職場に顔をだした。席につき、共同通信社から送られてくる文芸や論壇の時評に目を通す。それから催し物の案内記事の出稿具合をたしかめる。毎日、朝夕の二回開かれている、記事と紙面審査の部長会議はこのところ部長代理のデスクが出席するようになったので、夕刻もヒマである。顔をあげ、窓をみるとまだ明るい。もともと休暇をとっているので、水野は日が暮れないうち

に家へ帰ることにした。すぐ前の席でパソコンの画面をみつめているデスクにそつと声をかけ、廊下へでるとエレベーターを待った。ドアがひらき、上から降りてきたかこの真ん中にひとり、同期入社の人津和田俊一が立っていた。

「やあ、水野、どうなん？」

「おかげさまで」

仕事ではなく、からだのことである。ドアが閉まった。

津和田のよくこえた下顎がゆるんでいる。かれは専務取締役で次期社長の呼び声も高い。

「何よりじゃないか。お互い元気で退職を迎えたいな」

津和田は野太い声をだし、水野のシミが目立つ肌荒れした横顔をちらつとみた。

水野がだまっていると、コート襟元のぞいたペレバレンチノのマフラーをすつとなかへ押し込み、こいつ、息子が正月に帰ってきたときの土産でね、なかなか暖かいよ、と聞きもしないのにいった。

「やわらかそうで、いい色じゃないか」

「そうかね、あいつも少しは気がきくようになった」

と満更でもなさそうである。津和田には息子と娘がいて、ふたりとも東京にある国立大学を卒業し、息子はイタリアの研究所、娘はドイツの建築事務所で働いている。水野の一人息子は一浪して難関でもない私立大学へなんとか進学し、そのまま名古屋の自動車部品メーカーに就職していた。

ドアが開き、津和田が先におりた。

「ちよつと早いね、道後で会のあと、これでね」

よくこえた指で酒をのむふりをし、背を向けると足早に去っていった。

みかん畑の丘を造成した団地のなかに水野の家はある。お四国参りの古刹が近いので、あとひと月もすれば、菜の花の咲く野道を白装束の歩き遍路が、鈴の音を響かせながらゆきかうすがたをみかけるようになる。

家にかえると、玄関の三和土たたきにゴミ袋が置いてあった。なかに生ゴミがはいっている。朝はなかったから、置いたのは久美子にちがいがなかった。生ゴミの収集日は月曜と木曜で、水野が出勤前に台所の生ゴミの袋を閉じてむすび、収集場所へもってゆくことになっていた。明日がその日だが、久美子が気を利かしここまで運んだのだろうか。げんげんな思いにかられて見下ろすと、ゴミ袋のむすび目はほどけ、開いた口から生臭いにおいが立ち上っていた。

茶の間へゆくと、久美子は韓国ドラマをぼんやり観ていた。

「ただいま」

と、まるくなつた背中へ声をかけた。久美子は驚いたようにふりむき、すぐリモコンでテレビのスイッチを切った。

「生ゴミが玄関にあつたけど……」

「ごめん、あなたが出し忘れたのかと思つて収集場所までもつていったの。でも回収車が来た気配がないから、行つてみるとうちのゴミだけ置いてあつた。あたしまちがつた」

「うむ、今日は水曜日。生ゴミは明日」

「わかつているわよ！わざわざいわなくても」

久美子はヒステリックに叫んだ。

「なんだ、そんな大きな声出さなくてもいいじゃないか」

とがめると、久美子はぶいっとむこうをむいた。

寝室へゆき、着替えをすまし、やさしく訊いた。

「ご飯は、先に食べたの？」

「ええ、待てなかつたから、ひとりですました」

と久美子は落ち着いた声でこたえた。

「すまないね。ちよつと予定より遅くなつてしまった」

「あなたの分、食卓にならべてある。いま味噌汁温めるから」

久美子はのっそり腰をあげた。

ここ一年ほど前からである。久美子は夫の帰宅を待たずに、夕刻の五時きっかりに自分ひとりで夕食をとるようになっていた。休日もやはり五時がくると食事をはじめるので、水野は休みの日は久美子にあわせて早い夕食につきあうようにしていた。

腎臓を無駄に抽出したことが妻の重いトラウマになっている、と気づいたのは、早めの夕食がはじまりだしたところからである。やがて夕食だけでなく、朝食も入浴時間もきっちり固定されるようになった。忘れっぽくなり、なんとも同じことを訊く。そんなある日、冷蔵庫をのぞくと、食べ残しの副食、生野菜、それにいろいろな種類の冷凍食品がごちゃごちゃになつて詰め込まれていた。

「少し、かたづけけないと」

注意するときつと表情がくもり、

「あー、もう、あたしこの頃へん！ 冷蔵庫にあるのにまた買ってしまふ。メモしても、

メモをなくしてしまう。失敗ばかりなの」

といらだつのだった。

それからというものの、水野はニュース番組をみたあと久美子をつれ、車で閉店間際のスーパーへ買い物に出かけることにした。最初は三日に一度だったが、久美子が夜のドライブを楽しみにするようになってからは毎晩、市内を小一時間ほどぐるぐる走り回っている。その間、彼女は助手席にじっと座っていた。何を話すわけでもないのだが、終始おだやかで少女のような表情をみせるときもある。

この日も、スポーツニュースが終わるとドライブにでた。

明かりの乏しい田園地帯をぬけ、市内にむかう峠の道路をのぼった。頂きには開発が中断されたままの住宅用地があつて、星空がきれいに見える。水野は道路をはずれ、広場の南端に車をとめた。

暖房をいれたまま、土居裕子のCDアルバムをデッキにさしこんだ。

子育てをしていた頃、テレビ番組の「歌のおねえさん」だった彼女が歌う文部省唱歌がふたりとも好きで、何枚もアルバムをもっている。車内に澄み切った懐かしい歌声が何曲かながれ、「冬の星座」になると、久美子も口ずさんだ。

「いつ聴いてもいい歌だね」

「でも、星、見えないよ」

「そうか、そうだったね」

水野は足もとのタオルで久美子の前のフロントガラスをふいた。ガラスは水っぼくて、星々がにじんで見える。

にじんだ星々をながめていると、

「油断、できません」という内藤の言葉が脳裏をかすめた。白衣すがたの丸山が手錠をかけられ、刑事にひかれて医学部の前の大通りがあるかされている。

妄想をふりはらうように、水野はぶるぶる頭をふるといった。

「外へ出てみよう」

「いい、寒いから。ここでいいよ」

歌声がやみ、不意に静かになった。すると久美子は顔をあげ、

「正ちゃん、あたしのこと嫌いになったら、いや」

まるで恋人時代にもどったかのようにいった。

水野は初老がちかくなった妻の手をひきよせ、歌声を再生させると聴き入った。